

## 2013 年度 Happy くらす作品コンクール 授賞式・座談会

授賞式終了後に「青山学院大学の教育をより良くするには」というテーマの下、座談会を開催しました。Happy な授業の思い出を作品にして提出してくれた受賞者のみなさんと全学 FD 委員教職員で意見を交わすことで、学生が望む授業をつくるためにはどうしたらいいのか考察する有意義な時間となりました。

～はじめに～



全学 FD 委員会委員長

学務及び学生担当副学長 長谷川信

**長谷川** 副学長の長谷川です。全学 FD 委員会の委員長として、授業改善等を担当しています。ここは学長室で、普段は学長先生がいるんですけど、今日は不在なものですから場所を借りて、このように Happy くらす作品コンクールの授賞式を行いたいと思います。このコンクールについては、昨年度から始まったばかりなんです。昨年度も受賞した方には来ていただいて、賞状の授与等をしました。今年はそれだけではなくて、終わってから皆さんとも少し懇談して、テーマが大きすぎますけれど、今後の青山学院大学の教育をどういうふうにしたらよいか、もう少し細かく、こんなふうにしたらいんじゃないかとか、そんな話も聞かせていただきたいと思っています。今日は皆さんの受賞を祝すということ、後で少し意見交換をさせていただければと、そんなふうに考えております。よろしくお願ひします。

～Happy くらす作品コンクール～

**長谷川** このコンクールのことは前から知っていました？



最優秀賞 塩田伸一さん(総文研究科 2 年)

**塩田** いや、ポータルで情報を見て知りました。

**長谷川** すぐ応募してみようと思いましたが？

**加藤** もともと書くのは好きなほう？

**塩田** そうですね。

**加藤** 私、全学 FD 委員会の副委員長をしております、加藤と申します。よろしくお願ひします。「Happy くらす作品コンクール」というアイデアが出てきたのは、授業の最後に、学生の皆さんによる授業アンケートがあるじゃないですか。あれはどちらかという、教員に対して、教員がちゃんと授業をしたかどうかというのを、学生の側からむしろ非難、厳しく見る、評価するという感じに主体があつて、教員のほうとしては、どちらかという、結構辛いものというのがありまして。でも、教員のなかには学生にすごくいい影響を与えた授業をしている先生もいるということは、学生たちと話をして聞いていました。そういうポジティブな面を学生の皆さんから聞かせていただいて、教員にとっても励みになるような、学生の間でもそういう思いを共有できるような、そういう場があつたら

いいなということで、こういう企画ができました。今年も皆さんから、皆さんのいい授業の思い出を聞かせていただいて、本当に頑張っている先生がたくさんいるんだなということを聞いて、私たちも励みになっている、そういう企画になっています。

**長谷川** 去年退職された先生の授業がとても良かったという文章があつて。それを聞かれた先生は、とても喜ばれていて。

**塩田** 僕も、山内先生に報告したんですよ。「ありがとう」と言ってくださって、良かったです。

**長谷川** 山内先生の授業、これは学部の授業なんですか？

**塩田** そうですね、学部の授業です。ただ僕は学部は英文科ではなかったのですが、普通英文科の人は必修かもしれないんで、実はなんか、あんまり選ばないほうがいい、みたいな体で。そのへんよく分からなくて。

**加藤** 工学系というふうに書かれていましたか？

**塩田** あ、工学が専攻なんです。

**加藤** で、今は大学院で総文で？

**長谷川** 山内先生は、若干わたしも面識はあつたんですけど。

**塩田** 書いてある通りに、すごく本当に楽しそうに授業をされるので、引き込まれる感じで、すごく面白い。細かい文法の話もあるので、内容的には結構難しいんですけど。それですごいなと思ったのがあつて、良い授業というテーマだった

ので、これ書けるかなと思って、それで書いたんですよ。

### ～各受賞者の心に残った授業～

**加藤** 森さんは、フランスでも何年も働いてらしたそうですね。

**森** 14年間フランスにおりまして。旅行会社で働いていたんですけど、4年前に帰国して今度は在日のフランス企業で働いています。今1年生なんですけれど、MBAを取ろうと。先生の授業というんですかね、教えるテクニックと言ったら変なんですけど、引き込まれるような、興味があるように教えてくださる先生ばかりなので、やっぱり先生の技術というのもずいぶん上がったんだな、みたい。昔は、一方的に聞いているようなイメージがあったんですけど、そういう感じではなくて、毎日楽しいです。

**加藤** 学部時代は何学部でいらっしたんですか？

**森** 社会学なんですけれど、でも全くフランス語とかはできなくて。実は年齢ばれちゃいますけど、30歳になってからフランス語、アーベーサーから始めたんですね。

**加藤** そんなにたくさんビジネスの経験をされていて、すごく勉強になるというふうに書いてくださっていらっしゃいますけども。

**森** 今回のクラスですね、ビジネスエッセックス。海外にいて特に思ったことなんですけど、言葉ができるだけでは駄目なんですよ。言葉はもちろんできないといけないんですけど、やっぱり話す内容といっても、フランス人というのは、政治の話であれ、自分の意見というのをはっきり言いますし。それを言えないと、存在していないというふうに扱われてしまっ。だからやっぱり、常日頃から自分が何を考えているのか、何を思って生きているのかということですよ。そ

ういうことで、やっぱり人を惹きつけていかないと、仕事も動かないです。今回やっぱりビジネスだけでなく、宗教や倫理であるとか、いろいろな話をすることができたのは、自分を深めるという意味で良かったなと思っています。

**加藤** 張さんは、マネジメントゲームの。  
**張** 企業経営を勉強するとき、基礎学問を学ぶより、最初に企業を運営するのを体験できたのが良かった。私は韓国から来たんですけど。最初にゲームで体験できたのが、経営学に興味を持たせるというようなきっかけができたと思います。加藤先生にミクロを、前期に教えていただきました。

**加藤** 経営学部で今年から新しく始めた形式なので、教員のなかにも、始める前にいろいろと賛否両論あって。実際の企業経営ではないわけじゃないじゃないですか。ゲームの中なので、本当に学生が勉強できるのかどうかということに疑問を持つ教員もいたりして。だから、張さんのようにこういう文章を書いてくださると、すごい励みになると思うんです。本当に、いい経験になったんですか？

**張** はい。ファイナンスを学ぶときも、急に市場とか学問として学べると、あまりよく理解できないんですけど、ゲーム自体が株価を上げるゲームなので、いろいろ自分で戦略を工夫しないと行けないので、自然に企業の回る原理だったり、思ったより勉強になりました。あと、他の経営学を学ぶときも、自分の企業の株価を上げるために、実践的に考えながら学ぶので、もっと勉強になったと思います。

**長谷川** たまたまなんですけど、今日ここにいる3人は経営学部の教員なので、うれしいですね。

**張** 友だちとみんなで、「どうやって戦略立てた」とか話しながら、誰の株価が

上がったのかみたいな話とかをしていて。LINEで「どうやって戦略立てた？」とか話をしている。それもなんか、みんな考えるきっかけにもなった。

**加藤** それは本当に嬉しいです。

**中邨** 僕も実は、3年生向けの科目でビジネスゲームをやっているんですけど、一番盛り上がるんです。講義じゃないので、結果が売上げでボーナスと出たら、勝った、負けたというのがやっぱり面白いらしくて。

**森** 実践できるっていいですよ。ね。

**中邨** それをちゃんと考えさせないといけないので、工夫はしていますけど。ただただ入力で終わりじゃなくて、なんで上がったか下がったか、ちゃんと分析しなさいというようなことも。経営学部の学生さんは、やっぱりみんな、しっかり勉強をしてくれていると思います。

**加藤** なぜ上がったのか下がったのかという理由は、後できちんと理解できていますか？

**張** 結果をテンプレートに自分で作成するんですけど、みんなのと比べて、なんで上がったか、グループで作ったりとかして。先生が、理由を探すために市場の全部の情報を載せてくれるんですけど、それを見ながら、誰が何に投資して上がったかとか考えたりする時間を設けてくださったので。ちゃんと分析することができました。

### ～青山スタンダードについて～

**長谷川** 鈴木梨歩さんは、青山スタンダード科目を取り上げていただいて。わたしは青山スタンダードの担当をしているものですから、とっても嬉しいんですけども。こういう理系の科目というのかな、内容を聞いてなかなか分かりにくいところもあるのかなと思うんですけども。



優秀賞 鈴木梨歩さん(比芸2年)

**鈴木** はい。もう全然分からないです(笑い)。基本的には、「はあ」って感じで聞いていて。レポートのときにだけ、振り返りながらぎっしり詰め込んでいて。授業中はぼかんとしていることが多いですね。

**長谷川** なるほどね。

**加藤** この授業で、科学に対する考え方が変わったみたいに書いていらっしゃいますね。

**鈴木** そうですね。これ、本当は東日本大震災のところまで書きたかったんですけど、汚染水の問題とかが、ちょうど書いている時に話題になっていて。汚染水がどれほど危険なのかとか全然分かっていなかったけど、今なら、自分で調べて能動的に発信することができるんだなというのが分かって。学科の先生に、福島出身ですごく東日本大震災に対してオピニオンが強い方がいらっちゃって、そのツイッターをフォローしていると、すごく発信されるんですよ。そういうのを見ていると、自分もこういうことができるんだなというふうに思えて。そういう基礎を作ったという意味で、作中ではC先生ってなっているんですけど、千葉先生の授業はすごく勉強になりました。

### ～短歌の作品について～

**長谷川** 今回、短歌が。田中さんと、もう一方福岡さん。お二人、佳作に選ばれているんですけど、これは日本文学科ですから、短歌の専門。

**田中** 短歌のゼミに入っていて、毎

週散策に行ったりですとか、テーマに沿ってみんなで歌を詠んで、お互いに批評をしあったりしているんです。31文字の中で、自分の伝えたいことを、他人にも理解してもらえるように表現するというのが難しく。初めは自分でこういうことを詠みたいというテーマがあっても、自分では分かるけど、他人にはなかなか同じようには伝わらなかったり、別の角度から取られて。それがまた面白かったりするんですけど。

**加藤** ゼミの時間にみんなで散策に行かれて、作品を作るのですか？

**田中** はい。テーマに沿った作品を。隔週で2週間に1回、歌会の時間と散策の時間とがありまして。歌会のときは、テーマに沿った歌をみんなで詠んできて、お互いに一番いいものを選んでりとか。あと、一番駄目なものを選んで、批評をしあったりして、自分の言葉をお互いに磨き合うということをしています。散策に出かけることで、また見つかることもありますし、何より他の人に言われて初めて気付く発見とかがあるので、すごい面白い授業です。

**加藤** それを繰り返していると、上手になっていきますか？

**田中** 以前は、与えられたテーマだけをどう表現しようかっていうふうに考えていたんですけど、日常生活のなかで、いいなと思ったことを少し短いフレーズにしてメモしてみたりだとか。今まで自分がやってこなかったようなことを、自然とできているというところに、自分がなんか成長したなというのを感じます。

**加藤** いつも考えているのですか？

**田中** 気付いたら短歌の材料を探していたりするんで、自分でも驚きです。

**長谷川** 日文に入るときから、短歌に興味があった？

**田中** いえ。短歌には全く興味がなくて、

今まで読み方とかも全くしらなかったんですけども、新しいところに挑戦してみようと思ったときに、短歌は全く触れたことがなかったので、ちょっとチャレンジしてみようと思いました。

**長谷川** あれは私にとっても難しいですね。

**森** テンポはいいんだけどね。

**田中** ありがとうございます。

### ～総合文化政策学部独自の授業～

**加藤** 島田さんは、本当に絵文らしい授業というか、こういうものは他の学部には全くない授業ですよ。

**島田** そうですね。もともと、受験生のときにこの学部を選んだ理由というのも、映画を撮りたかったんです。美大、芸大に行くほどの意思はないけれども、一般大学で映画を学べるところはないかなということも思っていて、それで総文という学部を見つけたので。もともと入りたかったゼミだったんですけど、単純に映画を作る楽しさみたいなものは違うところの、しんどさというか、面倒くさいこともたくさんやらなきゃいけないということ、やっぱりサークルと違う質というか、授業として学べたので、すごく面白かったですね。

**加藤** 内山先生はこういう分野の先生でいらっしゃいますか？

**島田** そうですね。映像産業のマネジメントをやられている先生です。あまり詳しくないんですけど、日本の邦画を支えていく団体に所属されている方で、そういうところからマネジメントとかを。プロデューサー視点で学ぶために映画を1本作ってみようということ。僕は映画を撮りたかったんで、作る側をさせてもらって。それをしながら映画をどうやって売るかというプロデューサー視点に結構重きを置いてやった授業だったので、自分が思っていたものと全然違う。

**加藤** 島田さんは前から映画を作っていたらしたんですか？

**島田** いや、大学に入ってからやりたいなっていうのがあって、大学で始めたばかりなんです。

**加藤** 大学でそういうサークルに入っているんですか？

**島田** サークルも、はい。青山クリエイティブチームという部活があって、そこもサークルでもやっていますし、ゼミでもやっているみたいな感じです。

**加藤** もっぱら撮るほうで、俳優のほうはやってないのですか？

**島田** たまにやります。サークルに人がいないので、それはもうお遊びでやるんですけど。ゼミだとオーディションするんですよ。学生映画なんですけども、プロの方にやってもらうので、オーディションをちゃんとしたりするので、やっぱり全然サークルとは違いますね。ちゃんとやらなきゃという。

**加藤** 総文のゼミではなにか作品を作ることが多いのですか？

**島田** いや、ちょっと特殊なほうかもしれないですね。広告とかで、実際に企業とインター的なゼミとか、ラボ・アトリエという制度もあるんですけども、そういうのをやっている人たち。銀ニャンプロジェクトとか、確かあれも総文の授業の一環で、銀杏を拾って、いろんなお店に配って商品に使ってもらいたいな。ああいう楽しい活動もあります。

**加藤** 今回この作品を作って、内山先生からフィードバックをもらい、たくさんのことを学ばれましたか？

**島田** そうですね。やっぱり、最初に作っていくと、映画は本当に難しく、つまらない作品しかあまりできないんですよ。やっぱり1本1本撮っていくことで、作り方とかがすごく分かってくるので。やっぱりサークルとかで数を作りながら。ゼミでは1年間に1本、大体半年

ぐらいの期間をかけて撮るので、自分のなかではそれを住み分けというか、サークルでは好きなものをいっぱい。CMとかも撮っているんですけど、短いとかを撮っていて、それで得たのをゼミの映画でしたいなと思っているので。あとは、来年は卒論の代わりに卒業制作がうちのゼミにはあるので、それに向けて作る準備はしています。

**長谷川** わたしは映画のことは全く分からないんですけど、映画のマネジメント側と作る側と、常に利害が違ったりするじゃないですか。そういう面というのは、こういう場面だとどうなんですか？そういう悩みはなく作る？

**島田** 要は、僕個人が作りたいものというのは、どうしてもちょっとテーマが万人受けではないものになってしまいがちにはなるんです。そういうときに、先生は「肉付けをするのではなくてそぎ落とせ」という言い方をされるんです。作品をスマートにしろという。それは、あまり僕ら学生にはない意見で。それは、多くの人に見てもらおう上で、作品をそぎ落としていく、スマートという言い方も変ですけど、商業映画にある綺麗な絵作りとかをしていくというのは、教えられましたね。

**加藤** 総文には、将来映画とか広告とか、そういう方向を目指している人はたくさんいるんですか？

**島田** そうですね。映画はあまり聞かないんですけど、広告のほうが多いかもしれないですね。

### ～先生に感謝を伝えたくて～

**加藤** 勝手に注で書いてしまいましたけど、戒野先生のことをおっしゃっているんですよ。

**中澤** そうです。お礼を言えなかったの、ポータルを見て、これに書いて出しちゃおうかなと思って。感謝を出すところ

がなかったの、こういうので残してしまおうかなと思って書いたんです。

**長谷川** 留学はどちらに？

**中澤** 留学というかワーキングホリデーで、カナダのエドモントンに行っていて。戒野先生の友だちのところにホームステイをして。学校は行かなかったんですけど、ずっとバイトをしていて。その後一人旅を2ヵ月ぐらいして、帰って今度はベトナムにインターンしに行って、2ヵ月して帰ってきて就活をしてという感じですね。すごい面白かったです。

**加藤** チップをもらったんですって？

**中澤** そうです。これ、すごくうれしかったんですよ。日本でバイトしていて、「お金いいよ、取っておいて」みたいなじゃないですか。スタジアムで働いていたんですけど、キャッシャーの仕事をやっていたときに、アイスホッケーのスタジアムなので、ハーフタイムにバーッとすごいいっぱい人が来るんですよ。そうじゃない時の、試合中の時間に子どもがバーッと来て、ポップコーンの大きいやつを買って。3ドル75セントなんですけど、5ドル札で払って、僕が1ドル25セント返そうとしたら、「とっときなよ」みたいな。

**加藤** 小学生に？

**中澤** 小学生に。でも、ちょっと嬉しいなと思って、走って行っちゃったので叫びましたね、「サンキュー」って。嬉しかったので、1ドルコインはまだ家にあります。その後も、なんかいっぱいもらったんですけど、やっぱり最初の子どものやつは、初めてだったのですごいしっかり覚えてますね。

**加藤** この東南アジアってベトナムだったんですね。

**中澤** はい。ホーチミンですね。他の大学のアイセックのメンバーにお願いをして、で、ベトナムのベンチャー企業を

紹介してもらって、IT 企業でベトナムの人と一緒に働いていました。

**加藤** 最初は食事で体調を崩して、嫌になりそうになったとか。

**中澤** いや、やばかったですね。最初の1 週間はすごく楽しかったんですけど、1 週間してから、最初は熱かな？3 週間で熱を2 回出して、その間腹をずっと壊して。あと、気管支炎になって、変な頭痛までずっと続いていて、本当に辛くて。本当に何回も帰ろうとしたんですけど、でも何にもしていないし帰れないなって、ベッドでずっとボーッとしていて。医者に行っても言葉が通じないし。一応日本人の医者にも診てもらったんですけど、その医者も「わたし来たばかりなので、ちょっと分からないですね。とりあえず整腸剤だけ出しておきますね」と言われて整腸剤をもらったんですけど、全然治らなくて。3 週間ぐらいずっともう、本当に辛くて、「ベトナム嫌いだわ」とずっと思っていたんですけど。1 ヶ月ぐらいしたらお腹が治ってきて、それからは、会社の人にいろいろな所に連れて行ってもらったり、ベトナムの友だちを紹介してもらったりして、すごく楽しかったですね。

**加藤** 戒野先生、本当に残念で。

**中澤** そうですね。びっくりしました。ここに書いていないんですけど、ちょうど先生にビジネスプランコンテストに参加しろと言われていて。青学の AVL という団体があるんですけど、青学ベンチャーラボが主催するビジネスプランコンテストに出て、ゼミのメンバー3 人で出て優勝したんです。その優勝報告をした直後に亡くなられたんです。報告ができて良かったよねと、ゼミのメンバーで話しました。

### ～授業をより良くするには～

**加藤** 皆さんは、それぞれに青学でいい

授業の体験をしてくださったと思うのですが、限られた授業ではなくて、全般的に見て、青学の授業を、もっとこうしたほうがいいんじゃないとか、そういう意見がもしありましたらお願いします。塩田さんは、大学教員を目指されていらっしゃるんですね。

**塩田** そうですね。青学で教えるのがベストだなと思ったんですけど。それもまあ、いろいろあるので、分からないんですけど。

**加藤** 青学の授業を、2 つの学部に渡って受けてこられましたけども。

**塩田** 先生は、すごく教えるのが上手だし、熱意がある方がすごい多いというイメージはあります。どちらかというと、学生にちょっと問題が。たぶん 1/3 ぐらいの一部はすごい真面目にやっていて、優秀な人もいるんですけど、半分ぐらいはちょっと微妙な感じがするんですね。だから、例えば山内先生の授業も、結構大教室でやっているので、前のほうはそれなりにやっているかと思うんですけど、後ろのほうだとどうしても私語というか、しゃべったりして。それも、山内先生はなんとかうまい具合にだめすかしながらみたいな感じでは。たまには、大きな声を出したりもされていたんですけども。どうすればいいのかちょっと分からないんですけど、せっかくいい先生がいっちゃって、いい内容をやっている。図書館とかもすごい充実していると思うので、環境としてはすごいいい

と思うんですけど、学生のほうに、もう少し目を開いてもらえる方法があると、すごいいいかなというふうに思います。環境としては、場所もすごいいいですし、こんないい学校はないと思うんですけど、本当にもったいないなという思いがたまにしていました。

**長谷川** 大教室講義の運営の問題ですかね。経営学部は、特に人数の多い授業がどうしても多くなりますから。そういうサイズの大きいクラスをどのように運営していくかというのはまた、少人数のゼミなんかとは別のテクニックが必要で。

**塩田** でも、モチベーションをどうやって引き出すかというのは一番重要だと思うので、大きい教室だとしてもいいとか、そういうこともあっていいと思うんですけど。なんか面白いって思えるように、いい方法があるといいと思いますけど。

### ～体験型授業の魅力～

**加藤** 皆さんそれぞれに、作品にしてください。授業の中で、モチベーションを引き出されたというところがあると思うんですけども、そういういい授業とはまた違う授業もたくさん受けてらっしゃいますよね。こういう授業は自分がやる気になったとか、こういう教え方がいいんじゃないとか、いろいろありましたら聞かせてください。

**森** さっき張さんがおっしゃっていた



みたいに、自らが社長になったり、CEO になったりとか、体験できる授業というのはやっぱり楽しいじゃないですか。実践して失敗もするけれど、ただ聞いているだけという授業ではなく、やっぱり体験型というのは、まず1つ手だなと思います。あとは、やっぱりなんか意見を言いつらいとか、周りの空気を読んじゃうとか、これは青学というよりは日本全体に言えることじゃないかと思うんですけど。でも、ここにいらっしゃる皆さんとかは、自分からこういうのに応募されるぐらいなので、やる気がある方とか優秀な方だと思うんですね。だから、みんながやっぱり引っ張って、話そうよ、というような雰囲気に持っていかとか、なんかそういうような人たちが少しずつ増えていくといいなと思うし。まして、今からグローバル社会なので、黙っていてももう日本は淘汰されていくばかりだと、わたしは本当に危機感を感じています。ぜひ皆さん発言して、学校は失敗する場所だというふうに自分で割り切って、ここで学んだことが、将来社会に出て絶対に役立つと思うんですよね。でも、今ここで黙っていたら、たぶん社会に行っても同じようなことになりかねないんじゃないかと思ったりします。

### ～教員と学生の距離が近い授業～

**加藤** 現実としては、やはり意見を言いつらいというのは森さんがおっしゃったようにあると思うので、教員の側から意見を言いやすいような雰囲気を作っているような授業はありますか？

**鈴木** 私は、比較芸術学科という、去年できたばかりの学科なんですけど、人数が1学年で90人ぐらいしかいないんですよ。たぶん経済の人とかからしたらすごい少ないと思うんですけど。だから、1授業の人数も、多くて40人ちょっとぐらいで多くないんですね。だから、先

生がすごい近いんですよ。ちょっと失礼なんですけど、幅広い分野を受けると、自分の興味のない分野も芸術分野もあって、ちょっとと～とすると、浅井先生ってご存じですか？浅井先生が「おい、起きろ」、「ほら、寝るんじゃない」とか言って、みんなに声を1人ずつ声かけていて。名前を覚えていなくても、それぞれ特徴とかを覚えていて。「ほら、いつも一番前に座るやつ」とか、そうやって授業中に声をかけてくれると、浅井先生は自分たちを見ているんだとか、先生は自分たちを見ているから、ちゃんと受けなきゃ申し訳ないというのもあって。比較芸術の先生とかは、特にそういう方が多くて、能動的に授業を受けられる環境だと思います。

**加藤** それは経営学部からすると、すごいらやましい人数ですよ。今はそういうことなくなりましたが、最高550人のクラスまで教えたことあったので。今はそんな大人数はありえないですけど。

**長谷川** そうですね。経営学部も最近は割と。必修のでも100名ぐらい？

**加藤** もうちょっと多いかも。

**長谷川** 100名台ぐらいに抑えてクラスを作って。あとは、1年生からもアクティブラーニングとかを入れているところもありますし。だいぶ変わってきましたけど。まあ、人数は確かに多いですよ。

**加藤** 他の先生も、結構皆さんの名前とか覚えているんですか？

**鈴木** そうですね。もう本当に1回授業を受けただけなんですけど、佐藤かつら先生は、顔を見ただけでほとんどの学生の名前を言えたりして。やっぱり、普通じゃないんですね。比較芸術の先生は、高橋先生とかも、「鈴木です」と言えば、「あ、どっちの鈴木さんだっけ？」と言って、一生懸命覚えようとしてくれ

ている姿勢もあって。だから、「あ、顔は見たことあるよ」とかも言ってくださる先生もいらっしゃるし。だから、すごい覚えやすいですよ。だから、たまに青スタの経営とかの先生の授業とか受けると、後ろでしゃべっているのに慣れちゃって。リアクションペーパーとかにも、「後ろの方がうるさいんで、なるべく注意してください」といっても、もう諦めているというのもおかしいんですけど、普通に授業を進められていて、「ああ」みたいな。やっぱり違うなというのをすごく感じてしまいます。それは学科の問題なんですけど。私は教職の学芸員の資格を取っているんですけど、履修の科目の先生だと、先に人数が多くてしゃべる学生が多いのが分かっているんで、脅しをかけるんです。「しゃべったら、立って学年と名前を言わせるぞ」とか、「2回目があったら退室させるぞ」とか。でも、脅しがあると、みんなビクビクして、授業受けなきゃで、すごい怖いんですよ。だからやっぱり、脅しとはまた別の方法で、みんなが能動的に授業受けられる方法があればなというのは思います。

### ～少人数授業・能動的な学生参加～

**加藤** 中澤さん、何かありますか。

**中澤** はい。中谷安男先生という法政大学の方が、青学の経営学部のエフェクティブネゴシエーションという授業をされていて。今はもう、ライティングの授業もされているんですけど、少人数で、全部英語でやるんですけど。その授業は、僕としてはすごい理想というか。少人数なので、20人ぐらいしかいないんです。全部英語なので、最初は結構みんな萎縮しちゃうんですけど、先生が、多少つたなくてもバーッとしゃべるんですよ。なんか、外国の授業ってこんな感じなのかと思ったんですけど、手を上げるとか

じゃなくて、普通に会話みたいな感じでやるんですよ。ビジネスの本当に実践的な、ITはこうだったとか、バブルはこうやってできたんだとかトヨタはこうやって成功したんだ、そういう話をバンバンしていった。僕からしたらすごい興味深いですよ。全部英語だから、英語の勉強にもなるし。「どう思う？」みたいな会話形式なので。「トヨタ、このときどうしたと思う？」とか聞かれて、「どうしたんだろう」みたいなのも横の人としゃべったりして、思ったことをパッと行って、先生が「あ、そういう方法もあるよね」とか、絶対に否定はしないんです。絶対肯定して、すごい言いやすい場所になっていて、すごい楽しかったし、すごい充実するというか。学生同士もすごい仲良くなるし、先生とも仲良くなるし。それで、僕は先生と仲良くなって、先生が理事長を務めている学会にちょっとお邪魔させてもらったりとかもしましたし。こういう授業は、4年間で初めてだったので、こういう授業を学生が1年生の頃から受けていたら、すごい意識が変わるんじゃないかと思いましたね。あと、内容が身近なので。僕が1年生のときに会計学がすごく嫌いで、最初から会計学とかを教えられても、なんでこれをやらなきゃいけないのかよく分からなくて。これが実際に会社でどうなっているのかとか、よく分からなかったし。そういうのをイメージするためにも、身近な話題を最初に取り上げてくれるといいのかなというのは思いました。さっきのマネジメント基礎みたいに、自分で考えられるというか、自分の頭の中でイメージできる授業があると、能動的に参加しやすいのかなというのは、すごい思いますね。難しい言葉を並べられても、1年のときは特によく分からないですね。これが、ビジネスの場でどう動いているのかとかよく分からないとか、そういう

のが多くて、とりあえず覚えるとかというのが多かった。そういう参加できる授業というか、自分で興味を持てるような、身近な話題をどんどん出してくれたら、もっと分かりやすいんじゃないかなとは思ってますよね。よく、ケーススタディとかやるじゃないですか。ああいうのは、最初に答えを出さなくて、授業の最初に聞いたりしてくる先生もいて。そういうのは、いくら適当に受けようと思っている人も、やっぱりみんな考えるんですよ。なので、そういう授業がもっと増えたらいいのかなと思いますね。

**加藤** 中谷先生は、質問をした後に、ペアとか組ませて、答えを考える時間を与えてくれるんですか？

**中澤** はい。それもありますし、最後にグループワークもあって、今まで組んだことなかった人と組んでねと言って、3人ぐらいでグループ組んで、実際のケーススタディみたいな感じで。基本的に、経営は答えがないじゃないですか。この会社はこうしただけ、こういう考え方もあるよね、というもあるので、ジレンマというか、「この人たちはこうしただけ、あなたたちだったらどうする？」みたいな選択肢が3つぐらいあって、その理由も一緒に考えてくださいというのを4人ぐらいでやって。それも全部英語でやらなくちゃいけないので、ちょっと辛いんですけど、でもしゃべらなくちゃいけないので、恥もいっぱいかくし、いい意味で恥をかって素になれるというか。そうですね、グループワークとかもいっぱいあって。

**加藤** 中谷先生は否定されないといいましたけども、学生の側は、否定されなくても、どこが問題なのか、ということはあると学べるようになってるんですか？

**中澤** そうですね。トヨタだったら、「何が問題だったと思う？」とか言って。例

えば4Pとかあるじゃないですか。例えば僕が「プライス」と言ったら「なんでそう思うの？」って言われて。こうこうだからと言ったら、「あ、そういう考えもあるよね」って。「他の考え方でできる子いる？」とか聞いて、他の子がパッとまた違う意見を言って、「そういう考え方もできるよね」って言って。「実際にトヨタはこういうふうにしたんだよね」って言って。「もしかしたら、君たちの意見のほう为正しかったかもしれない」とか、そういう感じで進めるので、意見を言うのが怖くないんですよ。基本的に、それ違うとか言われないので。だから、最初は硬いんですけど、学生もどんどん意見を出すようになって。ちょっとまだしゃべれない子もいるんですけど。発言とかは、英語の優劣で多少は発言とかはあったんですけど。でも、みんな能動的にすごい参加していて、こういう授業はいいなというのはありました。

### ～大教室授業のむずかしさ～

**中澤** 本当にいい授業でしたので。大教室は、後ろのコントロールは難しいですよ。大学はいろいろな人がいるじゃないですか。いろいろな意思で来ているじゃないですか。友だちには、別に経営学を学びに来ているわけじゃない人もいっぱいいます。別に俺、自分のやりたいことをやっていて、みたいな。とりあえず受かったから来たとか、そういう人たちもいるんですけど、そういう人たちが楽しいと思えたら最高だと思うんですけど、先生も大変だと思って。注意すると授業進まないじゃないですか。授業も進めなくちゃいけないじゃないですか。そうするとやっぱり、板挟みなのかなというのはすごい思います。

**加藤** 注意してもなかなか静かにならないとか。

**中澤** ならないですよ。

**加藤** その学生の近くまで行って、「出てけ」みたいな感じでやったりというもあるし。そうすると、なんか雰囲気が悪くなっちゃうしとか、いろいろありますよね。

**中澤** 少人数が一番いいと思いますね。

**長谷川** 今は選択で、ちょっと置き場所間違えると、そういうことがなければそんなに多くはならない。

**加藤** それはもう、12~13年前の話で、今はそんな人数はありえないです。

**長谷川** その頃は必修で、私も1年生相手に350人とか、そんなの教えたことがあります。今はもうそういうことはないです。ですから、小分けにするにしても、語学クラスなんか特にそうなんですけど、レベルの問題がもう1つたぶんあるんですよ。語学クラスなんかはある程度、今はレベル分けを大ざっぱにはしているというなかたちになっていますけど。普通の授業はそういうことは難しいですから。

**中澤** 僕、就職活動して、周りがすごく変わったんですよ。就職活動終わった後の人は、すごく真面目になるんですよ。あと、休学した友だちも、すごい真面目になるんですよ。就職活動は、メンタルで結構やられるじゃないですか。企業もいろいろ調べるし、ビジネスの場というのを企業から学んで就職活動を終えるじゃないですか。そうすると、授業の内容も想像しやすくなっていて、内容もすごい面白いんですよ。いいか悪いか分からないですけど、1年生の頃から就職活動とかを意識できたらいいのかなというのはちょっと思いますけど。大

学生生活つまらなくなるんですかね。就職活動はすごい良かったです。それはすごい思いました。一番学べるんじゃないかと思いました。だって、企業の人たちは、そういう情報はそんなに取れないじゃないですか。新卒の僕だから、いろいろな企業のOB訪問とかして、いろいろ話聞けますけど、ライバル会社は絶対に聞けないじゃないですか。ちょっと、実際どうなんですか、みたいな話を聞いたりとかも、この立場だからできるじゃないですか。それを知った上で、また経営の授業を受けると、「あ、そういうことだったんだ」とかはありますね。なんか面白いです。分かりやすい。

### ~インターンシップ~

**長谷川** 中澤さんは、海外だけでもインターンシップに行ったりされていますけど、そういうのはどうですかね。インターンシップをかなり積極的に、1年生の頃から取り入れるとか、そういう大学の動きも今あるんですよ。

**中澤** 僕はいいと思いますね。すごい面白かったのは、ベトナムは英語がちょっと通じないところがあって、一応日本語を頑張って勉強しているんですけど、N4とかN5とかなんですよ。だから、普通に何か指示を伝えたくても、1時間とかかかったりするんですよ。類推の「らしい」と伝聞の「らしい」の違いが分からないとか言われてきて、「それ、俺も分からない」みたいになって、2人で調べながら、「こういうことなんじゃないかな」みたいに。あまりそういうのとかを意識したことがなくて。それ自体

で難しいのに、また文化の違いがあるじゃないですか。そういうので、だんだん常識ってよく分からなくなってきた。何が常識なのか分からなくなってきたし。ベトナムの現地の人たちにバッグを作ってもらって、実際にインターネットサイトとかでそれを売ったりとか、日本とベトナムの間の掛け持ちとかをやっていたんですけど、そういうのをやると、とりあえず面白いです。なので、そういう経験も最初しておく、違うんじゃないですかね。

**加藤** ただでも、経営学部というのはありますよね。芸術学科とかあんまりつながらないかもしれないですね。

**森** でも、どんな分野でも、一度外に出てみるというのはいいと思うんですよ。よく、国内にいても語学は学べるとか、いろいろ言うんですけど、たぶん中澤さんもそうだと思うんですけど、外に出ることで客観性が育つんですよ。日本のいいところももちろん見えてくるし、逆にここが問題なんじゃないか。比較対照がないと、人間というのは比べられないというか、どこが良くてとか、改善点も分からない。そういうものがまず認識できるようになるし、言葉とか、文化の要素も当然必要じゃないですか。そこに行ったことで、やっぱり全然違う世界が見えてきますよね。若いときにそういうことはうらやましいですね。本当に、インターンシップはいいと思います。

### ~留学について~

**中澤** 視野は広がりますよね。日本についてあんまり知らないなというの、すごい思いましたね。僕、高校のときは世界史を専攻していたんですけど、日本史を勉強しなかったの。外国の人は、自分たちの歴史にすごい詳しくて、僕全然日本史知らなくて、恥ずかしくなっていましたよね。あと、勉強に対する姿勢も、向



この人はすごい真面目で、大学はちゃんと学びに行くところなんです。日本はどちらかと言うと、遊びに行くところの要素が強いじゃないですか。これどうなのか分からないですけど、僕は1、2年生の頃は結構そういう要素が強くて、ゼミに入って変わりましたが。なので、違うなというのはすごい感じましたね、あと、日本の発言できないところとか。向こうに行って、僕性格がオープンになって、恥をかくこともあまりいとわない感じになって。発言もどんどんするようになって、就活中も全体の前で変な質問したりして、隣の人に謝って帰ったりかしていたんですけど。いいのか悪いのか分からないんですけど、そういうのに怯えないというか、一步勇気を出せるようになったというのは大きい。そういうのは、インターンとか海外の経験で身についたのかなと思いますね。

**塩田** カリキュラムに、海外留学を強制的に組み込む、みたいのはあってもいいと思うんですけど。たぶん他の大学とかではあるところもあると思いますけど。

**長谷川** そういう学部もありますよね、今。

**塩田** 1年生か2年生のときに、半年ぐらいどこかどこでもいいから行きなさい、みたいなのは、完全に組み込んだらというのもいいんじゃないかと。

**鈴木** それはいいと思います。インターンシップで海外に行けと言われても、私は特に芸術系なので、企業に放り込まれても右も左も分からないという感じになってしまうので。友だちは語学研修に行ったんですけど、普通の語学学校に行っても、語学の勉強をした後に、自分ですらただ美術館に行って、美術館見て帰ってきた、みたいな。自主的にそれを組むというのはすごい大変そうだったので、私は西洋美術が好きなので、西洋美術の国、例えばフランスの美術学校とか、カリキ

ュラムでその学部・学科に合わせた海外の経験というのを積ませてもらえるといいのかなと思います。

**塩田** 話の腰を折るようであれなんですけど、僕はカリキュラムには結構反対で、何のために夏休みがあるのかと思っているんですね。僕驚いたんですけど、ゼミ生のなかで、半分の学生は語学留学とか行くんですよ。やっぱり夏休みにまず、せつかくの夏休みをどう過ごすかって非常に大事だと思っていて。そういうので留学に行くとか、インターンシップに行くとか。アメリカの大学ってそうですよ。夏休みのときにインターンシップで。かつ、インターンシップでお金をもらえるので、それでアルバイト代で、授業は授業で勉強するというのは。だから、大学としてはその夏休みの過ごし方を支援するのはありかなと思っはいます。ちょっと、ごめんなさい、骨を折る感じであれなんですけど。理想的には、カリキュラムがあると単位もあるし、非常にいいとは思うんですけど。

**鈴木** 自分で調べて行くのも大変だし、プラスで費用もかかるのもあれだし。というのは、わたしも夏に行こうかなって少し悩んだんですけど、TOEICとかTOFELとかの試験も、「今まだ受けていないの、もう遅いよ」とか言われてしまって、「ああ、どうしよう」みたいになってしまっ。やっぱり、そういうのを目的に入っている人じゃないと、今さらやろうと思っても、ちょっと遅いになっちゃうときもあったんで、もう少し気付きの機会というのがあったらいいかなというのは、自分の調査不足もあるんですけど、思いました。

**長谷川** 最近になってなんですけど、青山スタンダードの中にも、留学向け語学みたいなものと、それに接続する短期研修みたいなのをくっつけて、配置したんですけどね。まだちょっと受け入れの数

がすごい少ないから、そういうのを早めにアナウンスされれば、だいぶ違うのかなと思いますけどね。

**中澤** 僕、休学した身なので、結構休学を勧めたいんです。僕はすごい良かったんです。海外だと、ギャップイヤーというのは結構多いんですけど、就職する前に1年、世界一周しているとか、そういう人に会ったんですけど。1年ぐらい本当に何もないと、何かしなくちゃやばいなって思うんですよ。カナダにいたときは、語学学校行こうと思っていたのに、高いからやめて。3ヵ月で40万と言われて、アホらしいと思ってやめて。面接をめっちゃ受けたんですけど、しゃべれなかったんで落ちまくったんですけど。そういうのも、何かしなくちゃいけないと思って休学していたら、1年間海外に行って何も得てこなかったら、これで「え？」ってなるんですね。わざわざお金払ってきたのに、なんだこれと思って。それで、僕最初は語学学校に行って帰ってくるつもりだったんですけどやめて、自分でバイトを応募して、バイトをやった。でも、このバイトだけじゃちょっと駄目だなと思って、一人旅をして、これももうちょっと何かやろうと思って、インターンやったんですけど。そういうのって、1年間ぐらいずっと休学期間があったからできたんですよ。授業があったら、僕は結構ちゃんと授業に出ちゃうんですよ。ずっと授業受けていたので、単位取り終わって今もう授業ないんですけど。だから、海外みたいに、1年ぐらい猶予とか持てたら、みんな嫌でも考えるんじゃないかなと、僕はちょっと思っただけなんですけど。休学費とかの問題もあると思うんですけど、それをもっと呼びかけてもいいんじゃないかなと。少ないですけど、休学した友だちって、みんなすごいイキイキしているんですよ。なんかやりたいことを見つけている人とかも

結構います。なんかよく分からない人もいますけど、そういう経験ももっと普通になっていいんじゃないかなってのは、僕はすごい思いましたね。僕が休学するって友だちに最初に言ったら、「え？」ってすごい言われて。僕もう、2年の冬か何かに決めていて。そういうのをもっと、大学から言ってもいいんじゃないかなと。そうやって帰ってきたら、もっと授業も、先生も面白いんじゃないかなと思うんですよ。

**塩田** 半年間休学してどっか行ってくる、というのをカリキュラムに入れ込んでしまえば。

### ～「英語の青山」の英語教育～

**張** 私は、青学の英語教育は実はすごいいいと思っていて。チャットルームだったりとか、自分で自主学習できる外国語ラボだったりとか、自主学習するプログラムだったりとか、すごいちゃんと勉強できるようにできていると思うんですけど、意外と知らない学生が多くて。外国語学習ラボだったり、本当に普通の市販の問題集よりよほどいいプログラムがあって。私はCALL教室だったりとかで学習したり、チャットルームに行って、英語ができなくても留学生の方と話したりとかして、青学で英語の勉強をちゃんとできるシステムがあるので、もっと学生に知らせて勉強できるようにしたらいいなと思いました。

**中澤** チャットルームいいですよ。

**長谷川** 他に、英語教育に関して感想とかありますか？総文とかどうですか？

**島田** うちの、英語教育はいいんじゃないかなと思っていて。クラスが9クラスで、コミュニケーションという授業が、45分の授業が週4回、1年生の時にあって。それは外国語のネイティブの先生だったので、文法ではないところを学ぶことができた授業があるのと、プロフィシ

エンシーという90分の文法を学ぶ授業があったので、英語の授業はすごいなとは思いましたね。ちょっと関係ないことになるかもしれないですけど、文系学部全部青学に来て、授業が取れないんですよ。それをどうにかしていただきたいんですよ。

**長谷川** 抽選になっちゃう。

**島田** そうなんです。抽選に結構今年落ちたので、それがモロに今年出たので、ぜひどうにかしていただきたい。

**加藤** 総文の英語の授業で、学生のみんなは実力が上がったと実感しているようですか。

**島田** それが、クラスによって違いますね。入学式が終わった後に、軽い文法テストみたいなのがあって、それによってクラスを分けられるんですね。ちょっとそこで失敗してしまいまして、僕は下から2番目のクラスになったので、正直、すごく簡単な授業でした。僕がいけないんですけど。

**長谷川** クラス分けは難しいですよ。

**島田** そうですね。その最初の試験のクラス分けで失敗しちゃったので。ただ、受験ではやっぱり文法だけで、語彙とか受験英語しかやっていなかったの、ネイティブの先生と話すというのは初めてだったので、それは面白かったですね。学力が上がったかどうかは別とするとですけど。

**長谷川** 総文はね、独特というか、学部を作るときに新しい仕組みを作ったので、そういう授業が受けられるんですけどね。

**島田** 基本的には、英語の授業はいいなとは思っています。

**加藤** 文学部も、割と少人数の授業が多いんですよ。

**田中** はい。少人数なんですけど、今おっしゃっていたように、先生によって全く授業内容が異なりまして、映画をただ

見ているだけのクラスもあったり、あとは本当に簡単な教科書の担当のところだけを訳して、他の人がそのメモを取っているとか。あとは、ネイティブの先生が、教科書も全部英語で、一言も日本語を使わない授業もあったりするので、本当にレベルがまちまちで。必修単位で必ず、日本語ず一言も話さないクラスを誰も1つは取れるようにしたりだとか、あと文法と。私、今文学部で日本文学科なので、日本文学科らしい教材を取り扱ったり、昔からの文学作品とかで、お互いに翻訳しあって、英語に直すところなんじゃないかとか、そういうふうに関連のある教材を取り上げたら、もっと興味が湧いて、学生たちも関心が湧くんじゃないかなというのは思っているんですけど。日本文学科で文学を勉強しているのに、全く訳の分からない英文だとか、分野が違うものを読んでも、あまり身にならないというか、ただ英語を訳してというところがあるので、教材の扱いがもっと違うと、学生も楽しめるんじゃないかなというのはあります。

### ～抽選システム改善の必要性～

**張** 私、青スタ全部落ちましたよ。

**島田** そうなんです。応募がいっぱいになって、抽選になっちゃうんですよ。

**加藤** 教室の人数を制限しないと、というのがたぶんあるのではないのでしょうか。

**長谷川** 教室サイズですね。その授業に割り当てた教室サイズで、受けられる人数が決まっちゃいますから。

**島田** 悲しいといえば悲しいです。

**鈴木** モチベーションも下がりますね。

### ～他学部科目の履修～

**中澤** 私は、カリキュラムとかを見ていて、総文の授業すごい面白いと思うんですよ。でも経営学部だと、絶対に受講できないんですよ。僕が受けたいなと思っ

た授業、全部履修不可で、全部総文の授業だから受けられないんだと思って。都市作りとかすごい面白いなと思ったんですけど。

**長谷川** 他学部の授業を受けるというのは基本的に難しいんですね。

**中澤** 東京大学とかは、学部を途中で選ぶみたいなスタイルじゃないですか。入ってから、自分で経営行きたいとか。そういうのを多少なりともこっちでもできないのかな、というのはちょっと思いました。転学も、試験とかもいろいろあってちょっと難しいって聞きました。

**長谷川** 転学制度は一応ありますけど、なかなか難しいんじゃないですかね。それでは今日は、改めておめでとうございます。また機会があれば、今後ともいろいろなお意見を聞かせてください。今日はどうもありがとうございました。



表彰式および座談会に出席された受賞者のみなさんと全学 FD 委員教職員